

## 価値理論の展開（二）

山 本 二 三 丸

### 四

さきに価値概念について説明したさい、価値の形態すなわち交換価値をとりあげて、それが価値の必然的な現象形態であること、そして、現象形態は必ず本質である価値から離れて運動するものであることが明らかにされた。交換価値は、商品価値を社会的に妥当に表示するものであるばかりでなく、現実商品生産の運動を規定するものであり、また別のとらえ方をすれば価値法則が現実法則としての自己貫徹するところの形態でもあるのであって、この点に交換価値の重要な意義が存するといえる。こうした交換価値の意義をできるだけ十分に与えておくことは、これからの価値理論の展開にとって無視しない要件だと考えられるので、こうした点について、いましばらくとどまってみておくことにしよう。

マルクスは、『資本論』第一巻第一章第一節で交換価値という誰でも感覚をもって与えることのできる現象をとりあげて、これに厳密な論理的分析を加え、その奥にかくされた価値の実体を解明しているのであるが、その分析を

おこなうにあたって、すでに、ヘーゲル『論理学』から学びとった唯物弁証法を適用して、現象形態と本質との関連の把握という、的確な視点を堅持しているのである。このことは、つぎにかかげる二つの叙述箇所を注意ぶかく読みあわすことによって、容易にうかがうことができる。

そのひとつは、マルクスが交換価値という現象をまずとりあげて、

「交換価値は、まず第一に、ある一種類の使用価値が他の種類の使用価値と交換される量的関係、すなわち割合として現われる。それは、時と所とによって絶えず変動する関係である。それゆえ、交換価値は偶然的なもの、純粹に相対的なものであるように見え、したがって、商品に内的な、内在的な交換価値 (valeur intrinsèque) というものは、一つの形容矛盾であるように見える。」

と述べ、こうした「形容矛盾」の真相を解くために、

「このことをもっと詳しく考察してみよう。」(以上、全集第三卷、五〇—五一ページ)

として、一商品が多数の交換価値をもっているという簡単な事実をそのままとりあげて、これについて、このうえもなく簡潔・的確な論理的分析を加えているつぎのパラグラフのうちの結論部分が、それである。

「ある一つの商品、たとえば一クォーターの小麦は、 $x$ 量の靴墨とか、 $y$ 量の絹とか、 $z$ 量の金とか、要するにいろいろに違った割合の他の諸商品と交換される。だから、小麦は、さまざまな交換価値をもっているのであって、ただ一つの交換価値をもっているのではない。しかし、 $x$ 量の靴墨も $y$ 量の絹も $z$ 量の金その他も、みな一クォーターの小麦の交換価値なのだから、 $x$ 量の靴墨や $y$ 量の絹や $z$ 量の金などは、互いに置き替えられうる、または互いに等しい大きさの、諸交換価値でなければならない。したがって、これからつぎの結論が生まれる。それは第一に、同じ商

品の妥当な諸交換価値は一つの同じものを表わしているということ、そして、第二に、およそ交換価値は、ただ、それとは区別される或る実質の表現様式、『現象形態』としてしかありえない、ということである」(前出、五一ページ、傍点―山本)。

そして、いまひとつは、右の結論にもとづいて、<sup>(8)</sup>「二つの商品、たとえば小麦と鉄をとってみよう」として、「1クォーターの小麦 = aシェンナーの弊」という等式をとり、「同じ大きさの一つの共通物が、二つの違った物のうちに、存在する」として、両者に共通な物を論理的抽象力を駆使して追究し、最後に、両者に共通にふくまれているのは、「無差別な人間の労働の、すなわちその支出の形態にはかわりのない人間労働力の支出の、ただの凝固物」であることをつきとめ、「このようなそれらに共通な社会的実体の結晶として、これらのものは価値―商品価値なのである」というようにして、価値の実体と価値を的確に把握したところで、これまでの論理的分析の経過をとりまとめて述べているつぎの要約的総括のくだりのなかに示されているものである。

(8) マルクスは、このように、小麦のもっている諸交換価値という、誰にでもとらえられる現象をとりあげてこれを簡潔に分析して、ここから、右のような二つの結論をただしく導きだしているのであって、この結論をふまえてはじめて二商品、つまり小麦と鉄をとって、両者の等置 $\equiv$ 等式が両者に共通な「ある実質(Gehalt)」を表現するとして、両者の差違の捨象、つまり論理的抽象力による両者に共通な物の抽象をおこなっているのである。このことは、先入主なしに第一章第一節の叙述をはじめからその示された文字に即して読んでいけば通常の国語的理解力をそなえているひとであれば、おのずから理解されるところである。しかし、和製デューリング先生の超能力を見習って、通常の国語的語法を超絶した画期的理解をつねに示すことを忘れない先生のお弟子たちは、書かれてある文字を無意味として捨象したり、書かれていない文字を紙背に読みとるといふ、超論理的理解力を示さないではないないのであって、右にあげた二の商品、小麦と鉄との等置 $\equiv$ 等式についてのマルクスの説明も、こうした超論理的・超国語的理解のもとにたやすくその非を批判されることになる。つまり、マルクスは、

なんの説明もなしに、二つの商品をいきなり持つてきてこれらを等置して、その等式が共通な物を示しているとしているのは、独断的・恣意的であつて、まちがっている、というのである。こうして、マルクスが遵守している通常の論理は、純粹超論理の前にあえなく潰えるということになるのである。

「諸商品の交換関係そのもののなかでは、商品の交換価値は、その使用価値にはまったくかわりのないものとしてわれわれの前に現われた。そこで、実際に労働生産物の使用価値を捨象してみれば、ちょうどいま規定されたところの労働生産物の価値が得られる。だから、商品の交換関係または交換価値のうちに現われる共通物は、商品の価値なのである。研究の進行は、われわれを、価値の必然的な表現様式または現象形態としての交換価値につれもどすことになるであらう。しかし、この価値は、さしあたりまずこの形態にはかわりなしに考察されなければならない」(前出、五三ページ、傍点—山本)。

右に引用した二つの叙述部分について、わたくしが傍点をつけた個所を読みくらべていただきたい。さきの引用では、「或る実質の表現様式、『現象形態』」となっており、あとの引用では、「価値の必然的な表現様式、または現象形態としての交換価値」となっている。つまり、さきの表現様式という言葉にたいしてあとでは必然的、なという規定をもった表現様式になり、また、さきでは括弧のついた「現象形態」つまり厳密な論理的な意味におけるものではなく、たんにそれが表面的に現われるときの形態というだけの意味で「現象形態」という言葉があてられていたのにならして、あとでは、論理的に厳密な意味における現象形態、つまり、ある本質を前提してその本質が必然的に現象するときの形態という意味で括弧なしの現象形態におきかえられている。

はじめに交換価値をとりあげてその分析をすすめるにあたっては、交換価値はただ「一つの同じものを表わす」も

の、「或る隠れた実質」を表現する仕方、その「実質」が表面に現われている形態だということが確認されていただけであるが、しかし、論理的抽象をおしすため、ついに「共通なもの」または「或る隠れた実質」がまさしく抽象的・人間的労働の凝固したもの、その堆積にほかならないこと、つまり抽象的・人間的労働の結晶として商品価値がそこにあることが究明されえたときには、たんなる表現様式または括弧づきの「現象形態」ではなくして、まさしく本質である価値の必然的な表現様式または厳密な意味における現象形態としての交換価値が問題とならなければならぬのであって、マルクスは、はじめ交換価値の分析にとりかかるまえに、すでにそれに先行する厳密・正確な研究によって価値と交換価値とが本質と現象形態との関係にあることを的確に把握していたがゆえに、右に見たような、よく似た、関連のある、だがその意味するところはまったくちがった、二つの表現を意図的に、そして明確に使い分けたものである。

いうまでもなく、現象形態という言葉は、厳密には、すでに本質が明確に把握されているときに、これとの関連においてはじめて用いることができるのであって、この本質と現象形態との関連の的確な把握は、弁証法の核心のひとつを成すものといってよく、自然および社会における法則を解明する科学の方法の基本となっているものである。マルクス・エンゲルスがことあるごとに必ずといってよいほど、「もし現象と本質とが一致するならば、およそ科学は不要である」と述べているのは、この点について不断の注意を怠らないよういましめたものである。

すでに前稿においても、価値とその現象形態としての交換価値との関連について、一応の説明があたえられたのであるが、なお、これからの価値理論の展開にそなえて、必要な補足の意味で、右の関連の意味内容について述べておくことにしたい。

価値は、その実体である抽象的・人間的労働の一定量が商品体のうちにいわば凝固したもののまたは結晶したものであって、この抽象的・人間的労働は、私的・個別的労働が社会的・平均的労働に還元されてはじめて価値を形成するものであること、したがって、ある商品の有する価値量を絶対的にとらえること、いいかえれば、ある特定の私的生産者の抽象的・人間的労働が社会的・平均的労働としてとれだけの労働量となるかを知ることが絶対的に不可能である、ただ相対的にのみ、つまり交換価値によって、示されなければならないということは、すでに述べられたところである。たとえば、三〇キログラムの小麦の価値は二五メートルの綿布に等しいという形で、はじめて社会的に妥当に示されるし、また示されなければならない。つまり、小麦の価値は、それとまったくちがった使用価値をもって示されなければならない。本質がそのまま現われるのではなく、必ずこれとちがった現象形態をとってあらわれなければならないということは、この場合、社会的・平均的労働の一定量の結晶が綿布というまったく別の特定の使用価値の一定分量として示される、という点にあらわれている。この場合には、本質である価値がそれとまったく質を異にする、使用価値——厳密に言えば、これと対立する使用価値、と言うべきであるが——をその現象形態としている、ということが出来る。だが、本質がそれとちがった現象形態をとるということは、右に述べたように、いわば質を異にしたものとして現象するということだけにとどまらず、さらに量を異にしたものとしても現象するという点を、ここでくりかえして指摘しておく必要がある。右の例でいえば、三〇キログラムの小麦のもつ価値量が五労働時間であるとした場合、その価値の現象形態である綿布二五メートルが実際にもっている価値量は五労働時間でもよいのである。いや、五労働時間でなくてもよいという表現は、適當ではない。むしろ——厳密を期するためには——五労働時間ではなくこれとちがった価値量をもつ綿布の一定量として現われざるをえない、といわなければならない。つま

り、本質である価値は、それとは質的にも量的にもちがった交換価値として必然的に現象せざるをえない、ということである。さきに、価値規定および価値法則についてひとまず簡単な要約的説明をにかけておいたが、そこでは、価値規定は社会的・平均的労働の量による価値量の規定を指すもの、価値法則は右の価値規定がいわば社会的に法則として妥当するものであることを示すものとして、両者を一応区別したのであるが、しかし、価値規定と社会的に妥当するものでなければ社会的規定としての意味をもたないのであるから、価値規定と価値法則とを別々のものとして離してとらえることができないばかりか、むしろ、両者はかたく結びついて一体を成しているものと解すべきであり、現実にはそれらが社会的に妥当する面に力点をおいて考えるならば、価値規定は価値法則の一面を成すものとして、むしろ価値法則のなかにふくまれるものと言うことができるのである。こうして、価値法則という言葉のなかに価値規定をもふくめて、さきの現象形態としての交換価値の意味をとらえなおすならば、価値のかわりに価値法則をもってきて、つぎのように言うことができるであろう。つまり、本質である価値法則は、必然的に、つねにこれから離れて運動する交換価値という現象形態をとって現実貫徹せざるをえないのであり、いいかえれば、不斷に価値から離れて上に、または下にたえず変動する交換価値の運動を通じてのみ、そのような交換価値のたえまない変動という形態においてのみ、価値法則は貫徹するのであり、また貫徹しなければならぬのである、と。

以上のように、価値とその現象形態としての交換価値との関連という側面をたえず念頭において事柄を考えるとすれば、これから価値そのものの内容または質の発展を追究していくときには、つねに、それとの密接な関連においてその現象形態としての交換価値についてその発展を説明していく必要があるということ、いいかえれば、価値そのものの展開と交換価値の展開とが結びつき相互に規定しあっていることを論究していかなければならない、ということ

がおのずから導き出されるのである。それゆえ、われわれとしては、これからの展開にそなえて、さしあたりまず、もっとも基本的な足場または土台として、一方に商品価値と価値法則とを据えておき、他方にこれにたいする必然的な現象形態および貫徹様式としての交換価値とその不断の運動とを置いて、これら両側面のいわば対応的關係を出発点として、商品生産がそのもっとも簡単な形態のものから、必然的にしだいにより複雑・高度なものに、つまり資本主義的商品生産に発展していくにつれて、右の両側面ならびにそれらの対応的關係がどのように展開をとげることになるか、というところにわれわれの論究の焦点をおいておくことが、適切ではないかと考えるのである。いや、論究の焦点をおくというよりも、むしろ、そのことを論究することが当面の課題となる、といったほうが当たっているといえよう。

ところで、商品生産の端初的な形態は、いうまでもなく生産物交換であるが、しかし、この最初の形態においては、価値生産はまだ使用価値生産から明確に分離するまでにはいたっておらず、私的交換に供される労働生産物の種類も量もきわめて限られたものであるので、このような未発展の商品生産段階をわれわれの当面の課題である価値理論の展開の考究のための最初の出発点として据えることは、やはり適切ではないといわなければならないであろう。われわれとしては、後段において価値法則の問題を歴史的に考察することが必要となるときには、右のような商品生産の端初的な形態を一応考慮にいれなければならないであろうと考えるのであるが、しかし当面の課題の論究においては、やはり商品生産および交換の相当程度の発展した段階を、いいかえれば商品形態の発展がすすんで貨幣商品が必然的に生まれるにいたった段階を、理論的考察の最初の段階として据えることが、必要かつ適切であるとかんがえるのである。ただし、貨幣がひろく流通するといっても、ここでは簡単な商品生産そのものに本質的な変化が生じ



たということではないのであって、直接的生産者による商品生産および交換が相当程度におこなわれ、価値生産がかなりの範囲を占めるようになったという意味での商品生産の発展を指していったものにすぎないである。

右のような商品生産の発展段階を考察の出発点とするということで、われわれは、さきに述べた価値・価値法則と交換価値との関連の理論的考究にとって、ただちに新たな要因が生まれてくることに気がつくのである。それは、交換価値が、たんなる交換価値からすんで、貨幣形態を採った交換価値に、すなわち価格というより進んだ形態に発展・変化をとげる、ということである。いまや、本質である価値の必然的な現象形態は、価格となる。そして価値法則の必然的な現象形態は、価格の不断の変動という、より発展したものとなる。こうして、価値生産のある程度の発展に対応して価格という形態での交換価値の発展がおこなわれる。ひとによっては、あるいは、価格と交換価値とは性質を異にするものであり、したがって価格を交換価値の発展した形態ととらえることを肯んじないものも見られるようであるが、しかし、貨幣形態が価値形態のもっとも発展した形態にほかならないという点を考えるならば、右のように両者を別々のものとしてとらえることが適切さを欠くものだということは、たやすく認められるはずである。そこで、交換価値についてこれまで述べてきたところを、今度は価格にあてはめて簡単な考察を加えておこう。

価格が、交換価値の発展した形態であって、本質としての価値の現象形態であるがゆえに、価格はつねに価値から離れて運動するものでなければならないということについては、『資本論』第一卷第三章「貨幣または商品流通」の第一節「価値の尺度」のなかで、価格という範疇についての最初の説明がおこなわれるさいに、はやくもつぎのように、明確に述べられているのである。

「価格は、商品に対象化されている労働の貨幣名である。それだから、商品と、その名が商品の価格であるところの

貨幣量とが等価だということは、一つの同義反復である。というのは、およそ一商品の相対的価値表現は、つねに二つの商品の等価性の表現だからである。しかし、商品の価値の大きさの指標としての価格は、その商品と貨幣との交換割合の指標だとしても、逆にその商品と貨幣との交換割合の指標は必然的にその商品の価値の大きさの指標だということにはならないのである。かりに、同じ量の社会的必要労働が一クォーターの小麦と二ポンド・スターリング(約二分の一オンスの金)とで表わされるとしよう。二ポンド・スターリングは一クォーターの小麦の価値の大きさの貨幣表現、すなわちその価格である。いま、事情が一クォーターの小麦を三ポンド・スターリングに値上げすることを許すか、またはそれを一ポンド・スターリングに値下げすることを強いるとすれば、一ポンド・スターリングと三ポンド・スターリングとは、この小麦の価値の大きさの表現としては過小または過大であるが、それにもかかわらず、それらはこの小麦の価格である。というのは、第一にはそれは小麦の価値形態、貨幣であり、第二には小麦と貨幣との交換割合の指標だからである。生産条件が変わらないかぎり、または労働の生産力が変わらないかぎり、相変らず一クォーターの小麦の再生産には同じだけの社会的労働時間が支出されなければならない。このような事情は、小麦生産者の意志にも他の商品所持者たちの意志にもかかわりがない。だから、商品の価値の大きさは、社会的必要労働時間にたいする或る必然的な、その商品の形成過程に内在する関係を表わしているのである。価値の大きさが価格に転化されるとともに、この必然的な関係は、一商品とその外にある貨幣商品との交換割合として現われる。しかし、この割合では、商品の価値の大きさが表現されうるとともに、また与えられた事情のもとでその商品が手放される場合の価値の大きさ以上または以下も表現されうる。だから、価格と価値の大きさととの量的な不一致の可能性、または価値の大きさからの価格の偏差の可能性は、価格形態そのもののうちにあるのである。このことは、けっしてこ

の形態の欠陥ではなく、むしろ逆に、この形態を、一つの生産様式の、すなわちそこでは原則がただ無原則性の盲目的に作用する平均法則としてのみ貫かれうるような生産様式の、適当な形態にするのである」(前出、一一六—一二七ページ)。

みられるように、商品価値の必然的な現象形態である価格は、現実にはつねに価値の大きさと一致するものではなく、必ずその上にまたは下にあってしかもたえず変動をくりかえし、そのたえまない変動を通じて平均的に、または事後的にみて、価値の大きさに一致するものだということが、ここに明確に説明されているのである。だから、「価値と価格との一致」をもって価値法則の貫徹だとし、「価値と価格との不一致」もしくは「不等価交換」をもって価値法則の侵害もしくは修正だとするさまざまな主張は、現実の価格の運動についても、またマルクスの明確な説明についても、マルクスの見地に即してこれをとらえようとする「古臭い」解釈にとらわれることのない、斬新な、まさに超マルクスの水準に立っていることを疑いもなく示すものといわなければならないのである。

ところで、交換価値の発展した形態である価格は、右に見たように、たんに価値から離れて運動するというだけにはとどまらないものとなる。量的背離は、交換価値において必然的であり、この点に現象形態である所以が存した。だが、価格においては、その背離は量的なものからさらに進んで質的なものにまで、いいかえれば「質的矛盾」をふくむものにまで発展をとげるのである。さきに見たように「価格形態の特徴」として量的背離を明らかにしたマルクスは、さらにすすんで、こうした「質的矛盾」について、つぎのように説いているのである。

「しかし、価格形態は、価値の大きさと価格との、すなわち価値の大きさとそれ自身の貨幣表現との、量的な不一致の可能性を許すだけではなく、一つの質的な矛盾、すなわち、貨幣はただ商品の価値形態でしかないにもかかわら

ず、価格がおよそ価値表現ではなくなるという矛盾を宿することができる。それ自体としては商品ではないもの、たとえば良心や名誉などは、その所持者が貨幣とひきかえに売ることができるものであり、こうしてその価格を通じて商品形態を受けとることができる。それゆえ、ある物は、価値をもつことなしに、形式的に価格をもつことができるのである。ここでは価格表現は、数学上のある種の量のように、想像的なものになる。他方、想像的な価格形態、たとえば、そこには人間的労働が対象化されていないのです。これも価値のない未開墾地の価格のようなもの、ある現実の価値関係、またはこれから派生した関係をひそませていることがありうるのである」(前出、一一七ページ)。

みられるように、価格は、たんに価値の大きさから離れて運動するものであるばかりでなく、価値をまったくもないものまで価格をもつものとして商品となりうるものにするという特徴が、ここに明確に示されている。このいわば「質的背離」という価格形態の特徴は、きわめて重要な意義をもつものである。というのは、さきにあげた「価値と価格との一致」をもって価値法則の貫徹であるとする超マルクスのな主張と並んで、これに劣らず斬新な超マルクスの主張としてかなりの支持者を得ているものに、「総価値と総価格の一致」をもって資本主義的生産の基本原則だとする見解があるからである。この見解にしたがえば、個々の商品あるいは個々の生産部門の総生産物については価値と価格との量的背離が認められるとしても、総生産部門の総生産物＝総商品については、その総価格は総価値に一致しなければならないのであって、たとえマルクス自身といえども、その理論のなかに「総価格と総価値との不一致」を許すような所論があるとすれば、それはマルクスが重大な誤りを犯すものである、との断を免れることはできないのである。このような、まさにマルクスそのひとをも超克するほどの超マルクスの斬新な主張は、やはり、右に見た価格形態の特徴についてのマルクスの説明など眼中にない、きわめて「高度」の水準のものというべきである。

が、これらの高説については、いずれ後段でその内容を吟味することにしたと考える。ただ、ここで一言つけくわえておくならば、マルクスがその理論的叙述にさいして、しばしば「価値通りの交換がおこなわれるとすれば」とか、または、「価格と価値との一致という前提のもとで」とかいった「但し書」をつけているのは、そのような前提のもとで考察することによって不必要な手間を省くことができるからであって、けっして、それが実際におこなわれているとか、それがおこなわれることが法則なのだとかいったようなことを主張せんがためのものではない。たとえば、ある商品についてその価値量に正確に一致した価格を $a$ とし、現実の価格がこれからプラス・マイナス $b$ だけ離れたものとすれば、実際の価格は $a+b$ である。ところで、この商品について理論的考察をおこなう場合、その価格を $a$ としても、はたまた $a+b$ としても、そこから導き出される理論的結論はまったく変わりはない。ただ、 $a+b$ とした場合には、 $a$ だけの場合にくらべてつねに $b$ がついて廻り、いたずらに煩雑になるだけである。「総価値と総価格との一致」の前提については、後段でたちいった考察がなされるはずであるが、これについても、ここでは、一言だけ、つまり、もし「価値と価格との一致」と並んで「総価値と総価格との一致」という「法則」がそのまま妥当することになれば、直接生産に関与する資本家階級部分と労働者階級部分とを除いて資本主義社会のその他の成員は一人残らず霞を食って生きながらえるという「夢幻境」にはいる幸運に恵まれることになるはずだという「結果」を指摘しておくにとどめよう。

さて、これまで縷々述べてきたのは、これからの価値理論の展開にそなえて、あらかじめその出発点または足場を固めておくべく、マルクスによってうちたてられた科学的経済理論のうちのもっとも基本的・要素的<sup>エレメンタル</sup>な価値概念について、とりわけ価値と交換価値との関連についての要点を整理したものすぎない。ところが、同じくマルクス『資

本論』について学びながら、マルクスの採っていたような「古臭い」見地を乗り越えて、はるかに高い、斬新な見地に立って、まことに美事な超論理的思考を駆使して、マルクスの経済理論を完全に超克し「揚棄」しつくした画期的な「原理論」をうちたてた世紀的人物がこの国に現われたものである。それは、ほかならぬ宇野弘蔵氏であって、氏の得意とする超論理的純粹思考と超国語的語法にかかると、マルクスの「平凡な」価値概念はたちまち論証不十分なものとしてその面目を失うにいたり、これにかわって、真に独創的・画期的な「価値論」がつくりだされることになったのである。もちろん、氏の創作になる主著『経済原論』は、ちょうどヘーゲル『論理学』についてマルクスがその中の玉石を識別して玉のみをとりだしたのとまったく同様に、「玉石混淆」の『資本論』の中から玉のみを選び出してこれに超論理的・超国語的吟味を加えてこれらをことごとく「原理論」的解釈のもとに磨きあげ完全に編成し直すことによって始めてうちたてられた世紀的「原理論」著述にほかならないのであって、そのページ数こそ、マルクス『資本論』の三〇〇〇ページに比べて僅々二三〇ページ足らずとはいえ、そのひとつひとつの文章に盛られた意味内容は実に奥深く、加えて超論理的思考と超国語的語法にかかる独自の命題<sup>(9)</sup>が随所にちりばめられていて、通常の論理的思考と国語的語法しか用いることのできない者にとっては、その真意を完全に読みとることは至難といつてよい。そこで、その画期的・世紀的著作である『経済原論』のうちの価値にかんするいわば端初的叙述部分をほんのすこしとりあげて、その深遠な意味内容を読みとることをこころみ、それがいかにマルクスの旧態依然たる価値概念を完全に「揚棄」しつくすことによって創造された画期的な「価値概念」を示したものであるかということとを、とくと玩味することにしよう。

(9) これらの真に創造的命題のうちで断然群を抜いている最高の傑作は、本稿でもさきにふれた(本誌三十四巻第一号、八二

ページ) つぎの命題である。——「商品・貨幣・資本は純粹の流通形態であつて、いかなる生産過程ともいかなる生産關係とも直接にはまったく關係のないものである。」

この命題について、わたくしはかつてマルクス經濟理論の見地から批判を加えたことがある(本誌第二十四卷第二号および第三号所載の拙論「經濟學における形態規定とはなにか——いわゆる「宇野理論」の性格規定——(一) および (二)」が、しかし、その批判はきわめて不充分なものであつた、というよりは、嚴密な意味での批判になつていなかった、といわなければならない。というのは、およそ批判とは、その論者の立場および考え方を十分に理解して、これとの關連においてその所論の「根柢」をただしく説明しなければならぬからである。だから、その論者とまったく異なる立場および考え方によつてその所論の誤りまたは錯亂ぶりを指摘するのは、眞の意味での批判にならないからである。そもそのわたくしの誤りは、宇野氏がマルクスと同じ考え方をし、マルクスの用いる概念規定をそのまま採りいれて論を展開していると思ひこみ、またそうでなければならぬと考へていたところにある。こうした考え方は純粹の先入主であり、完全な誤りなのである。宇野氏は、マルクスに学びつつマルクスを完全に超克し「揚棄」しつくりしているのであつて、マルクスにたいする宇野先生の關係は、ヘーゲルにたいするマルクスの關係と同じか、もしくはそれ以上のものなのである。それゆゑ、マルクスと同じ見地、同じ考え方、同じ概念規定は、宇野氏にはまったく通用しえないのである。氏の見地、考え方、そして概念規定は、マルクスのそれをはるかに抜くところの眞に画期的・世紀的なものである。もちろん、通常の、ありふれた論理的思考や國語的語法をもつてしては、氏のものとする画期的命題は、理解できるどころか、齒もたたないものである。それは、マルクスがつねに尊重し力説している弁証法的思考などは足許にもおよばないほど、比較を絶した超高度の、超論理的思考と超國語的語法を駆使することによつて、ひとり宇野氏によつてのみ体得されることのできた世紀的諸「命題」なのである。そこで、右のような氏の独自の方法及と絶対的見地を理解することに力点をおいて、さきにあげた世紀的命題をとりあげ、これにたいするマルクスの見地に立つ狭い限られた低水準のとらえ方を示し、これとの対比においてこの「命題」の画期的・獨創的意義を説明することをいささかこころみておくことにしよう。こうしたマルクスの旧態依然たる陳腐な見地と解釈にたいする、わが純粹理論家宇野先生の斬新にして画期的な超論理的見地と解釈の絶対的優越性をつねに念頭におくのでなければ、氏の獨創に成る「理論的」諸「命題」はひとつとしてただしく理解されえないといつてよいのである。

右の画期的「命題」については、おそらく、マルクスの見地と考え方によれば、つぎのような批判が出されるはずである。

マルクスにあっては、商品・貨幣・資本はすべてそのまま形態であり、形態規定である。たとえば商品についてみれば、労働生産物が商品という社会的形態をとること、そのことが形態規定なのである。そして、こうした形態および形態規定は、私的所有という基本的生産関係によって必然的に生ずるのであって、まさに人間の生産関係が不可抗力的に人間の外部にある物の社会的性質として現われ、この物の社会的形態が人間を支配するといふところにこうした形態の重要な意義がある。だから、いかなる生産関係とも関係ないというのは、形態および形態規定という概念規定をまったくわきまえないものだといふことを自己暴露するだけである。流通形態などという珍妙な言葉は、まさに精神錯乱的思考の産物でしかない、純粹のたわごとである。こういう「命題」を創作する「理論家」は、流通という言葉ひとつ知らないでつかっているのである。この「理論家」はおそらく、「商品は流通する。貨幣も流通する。資本も流通する」という一連の「命題」を頭に思い浮べて、「だから、商品・貨幣・資本はいずれも流通形態である」という「命題」をつくりあげたものであろう。だが、残念ながら、商品は、商品だけでは流通できないものである。商品の運動といえは、商品と商品との交換であって、文字で示せば、 $W_1 - W_2$ である。これは、商品の交換であって、商品の流通ではない。また、貨幣だけでは、逆立ちしても運動はできない。精々のところ  $G - W$ 、であるが、これは、貨幣の貸付けであって、流通とはいえない。商品に手伝ってもらってやっと貨幣がおこなえる運動は  $W_1 - G - W_2$  か、または  $G - W - G$  であるが、前者は、正確にいえば貨幣を媒介とする商品交換にほかならず、後者は貨幣の資本としての運動を示すものであり、そのどちらも貨幣だけの流通とはいえない。『資本論』で流通という言葉がはじめて出てくるのは、その第一巻第三章の表題——「貨幣または商品流通」——においてであり、その叙述が見られるのは第二節「流通手段」においてである。この第二節でよく説明されているように、個々の商品の貨幣の媒介による交換は互いに絡みあって全体として総商品の流通を形成するものとなっている。だから、個々の商品や貨幣をとらえて、それらが単独に流通するだとか、それらが流通形態であるのだとかいう「命題」をつくりあげるのは、典型的な錯乱的思考癖を示すだけのものであって、それらは完全な術学的たわごとでしかないのである。——と、こういう次第である。

だが、右のような批判は、マルクスと同じ見地、同じ考え方、同じ概念規定を採る者には通じるが、これとちがった見地、考え方、概念規定を採る者には、通じようはずはない。加えて、宇野氏の見地、考え方、概念規定は、旧態依然たるマルクスのそれらとは比べものにならないほど卓越した斬新なものである。右のような批判がそれこそ軽くあしらわれるのは、まことに当然といつてよい。こころみに、その超マルクスの見地に立って右の批判にたいしてどんな反批判があたえられるかというこ



とを、不手際ながら描写してみよう。

「わたくしが用いている概念は、わたくしの考えにしたがつてわたくしがつかっているものであり、わたくしの意味においてつかっているのである。だから、その意味がマルクスの言う意味とちがつているからといって、それでは批判にはならない。わたくし自身の考え方、わたくし自身の用語について誤りを指摘するのだから、わたくしの所論を批判したことにならないではないか。

そもそも、わたくしは、流通という言葉がマルクスがそれに与えているような意味ではつかっていないのである。マルクスの考え方や用語には問題がないと考えるのは、はじめからマルクスの言っていることはすべて正しいときめてかかることであり、そういうやり方は科学者として採るべき態度ではない。わたくしは、流通という言葉、わたくし自身の考え方にしたがつて、マルクスのような狭い、形式にとらわれた解釈ではなく、真に原理的立場に即した斬新な解釈のもとに用いるのである。すなわち、それは、文字通り、「流れ通る」ということである。商品を見たまえ。商品は売手の手から買手の手に流れ通って行くではないか。貨幣でも同じで。それは商品とは反対の方向に、すなわち買手の手から売手の手に「流れ通って」いくのである。資本でもまったく同じことができる。〇——〇<sub>10</sub>だつて、資本が貸手の手から借手の手に「流れ通って」いくではないか。形態にしても、わたくしの与えている意味は、マルクスのしているようなヘーゲルかぶれの解釈によるものではない。わたくしは、文字そのものに即して正確に、寸分の誤りもない解釈を与えるのである。形態とは、文字どおり、形であり、われわれが事物をそのあるがままにとらえたものが、その事物の形態である。商品・貨幣・資本という形態はわれわれの眼の前で流れ通っているのであり、それらは真正銘の流通する形態である。だが、このことを疑いえるか。だから、商品・貨幣・資本はりっぱな流通形態である。

また、「いかなる生産過程ともいかなる生産関係ともかわりがない」というのも、現実の歴史をそのまま眼でとらえたものであつて。事実を直視しさえすれば、簡単にうなずけることである。原始共同社会でも、奴隸制でも農奴制でも、りっぱに商品があり貨幣があり、また商人資本や高利貸資本があつたではないか。だから、どんな歴史的社会であらうと、その生産者がだれであらうと、その生産者のおかれた社会関係がどうであらうと、商品・貨幣・資本はりっぱにそこで流れ通っていたのであり、これを純粹の流通形態ととらえることになんの不思議もありえないのだ。ひとによっては、マルクスを真似て、原始共同社会の内部には商品・貨幣はなく、共同体と共同体との間でだけ商品・貨幣があつたなどとしてきたようなことを言っ

ているが、内であろうと外であろうと、共同体社会において商品・貨幣が存在したという事実はまげられるものではない。内と外を使い分けすること自体、根拠のない独断的やり方といわなければならない。

これを要するに、マルクスの見地や考え方や概念をもってきわたくしの画期的な原理論の見地にもとづく命題を批判しようとしても、それはできない相談なのである。わたくしのつくりだした世紀的な原理論について批判するというのであれば、わたくし自身の見地や考え方についての誤りや矛盾をつくのでなければ、とうていだめである。」

氏の誇る画期的著述『経済原論』は、右のような超マルクスの世紀的な命題を根拠として、「流通論」が第一篇におかれ、ついで第二篇「生産論」、第三篇「分配論」という、同じく画期的・世紀的な構成となっている。マルクスが『資本論』で採っているようなもつとも簡単な・もつとも要素的な法則「範疇からしだいに規定を加えていってより複雑な・より具体的な法則」範疇に上向していくという弁証法的な組み立ては、もちろん、ヘーゲルかぶれの観念的構成を真似たものとして世紀的「原理論」創造者の採用するところとはならず、むしろ、誰でもが見ただけでとらえられる確実な形から展開するという、古典派経済学の構成のほうがより適切なものとして採用されたのであるが、そこはわが世紀的創造者のことである。古典派経済学者の採っていた「生産」を第一におく構成は簡単にしりぞけられて、さきの画期的「命題」を根拠として、「生産論」に代わって「流通論」が第一篇を占めることになったのであって、この点で、氏の「原理論」的構成は、まさに前人未踏の世紀的創造物と称されなければならないのである。

ところで、いまもしここに古典派経済学の流れをくむ一経済学者がいて、「すべて生産がはじめにあって人間も社会も存続できるのであり、生産されたものが商品として交換され売買されるのであるから、流通論を最初におくのは誤りである。生産論こそ最初におかれるべきものである」といった批判文をものするとしたならば、この世紀的「原理論」創造者は、なんと答えるであろうか？ おそらく、つぎのような論駁が超マルクスの響きをもって下されることであろう。

「生産、分配、交換、流通という区分をもって経済学原理を説く古典学派の構成は、とつくの昔にマルクスによって批判されているのである。わたくしは、マルクスの批判も考慮にいれ、さらにマルクス自身の構成の観念的不充分性もよく見きわめて、まず見たとおりの現象である流通をとりあげ、それから生産に進むという方法をとったものである。だから、わたくしの主著の構成は、まさに古典学派とマルクスのそれとをあわせて、これらを正しく「揚棄」することによってはじめてうちだされたものであり、その意味でまさしく世紀的・画期的な構成であるといつてよい。だががこのことを疑うであろうか！」

われわれもまた、氏がつぎつぎと發表された論文著書が、まさに前人未踏の境地を往く画期的・世紀的なものにほかならないことを、無条件に認めるのに吝かではない。とりわけ、氏が駆使する超論理的思考と超国語的語法の全面的発露の偉大な効果については、ただただ驚嘆させられるばかりである。その余人の追隨を許さない「論理」構成のほどは、つぎにとりあげられる氏の創作にかかる文章が、よくこれを実証してくれるものと期待されるのである。

## 五

宇野弘蔵氏の名著『経済原論』のなかで、その第一篇「流通論」の第一章「商品」のはじめにおいて、まず商品価値についての説明があたえられているが、マルクスが『資本論』第一巻第一章の第一節と第二節との二つの節をそれにあてているところの価値の説明は、さすがマルクスを軽く超克するわが純粹論者の超論理的思考のおかげで、つぎにかかげるような、わずかに四つの文章をもって簡潔に片づけられているのである。こうして同じ価値についてのマルクスの説明とわが「原理論」創造者のそれとをつきあわせるだけで、後者の内容がいかにすばらく豊富かつ圧縮されたものであるかが、推察されるのであり、これにたいするわれわれの吟味も、いきおい、できるだけ細密かつ正確に、極力「原理論」的見地に即して慎重・綿密にしなければならないということにならざるをえないのである。まず、つぎにその四つの文章を引用してかかげるが、すぐつづいておこなわれる吟味のさいの便宜を考慮して、各文章ごとに段落をつけ、またそれぞれの文章の頭に①、②、③、④という番号をつけておくことにしよう。

「①商品は、種々異ったものとして、それぞれ特定の使用目的に役立つ使用価値としてありながら、すべて一様に金何円という価格を有しているということからも明らかなように、その物的性質と関係なく、質的に一様で単に量的に

異なるにすぎないという一面を有している。

②商品の価値とは、使用価値の異質性に対して、かかる同質性をいうのである。

③それは商品が、その所有者にとって、その幾何かによって他の任意の商品の一定量と交換せられるべきものであることを示すものにほかならない。

④またかかるものとして価値を有しているわけである」(新著『経済原論』、岩波全書、二二ページ)。

一見するときわめて平易な説明がここにあるように思われるが、しかしすこしく注意して読みかえすならば、ここには通常の論理的思考や普通の国語的語法にしか通じていない一般の読者にとってはとうてい理解しえないような、きわめて高度の超論理的思考と同じく超国語的語法によって創造された画期的な、きわめて奥深い内容がひそんでいることが、十分に感じとられるのである。そこで、できるかぎり、創造者の独自の考え方と語法とに忠実に即するという読み方によって、その奥深い内容をさぐることにしよう。

まず①の文章について。

この①は、みられるとおり複合文章であって、三つの文章の組合せから成っているものである。すなわち、「商品は種々異ったものとして、それぞれ特定の使用目的に役立つ使用価値としてありながら」、「すべて一様に金何円という価格を有しているということから明らかように」、「その物的性質に関係なく、質的に一様で単に量的に異なるにすぎないという一面を有している」の三つである。そこで、考察の便宜のために、これら三つをそれぞれ独立の文章の形にし、主語の商品をそれぞれの頭につけて、別々に並べて書くならば、つぎのようになるであらう。

イ「商品は種々異ったものとして、それぞれ特定の使用目的に役立つ使用価値としてある。」

ロ「商品は、すべて一様に金何円という価格を有している。」

ハ「商品は、その物的性質に關係なく、質的に一樣で單に量的に異なるにすぎないという一面を有している。」

このようにして①の複合文章を分解してみれば、それを構成している各文章の意味はかなりとらえやすくなるようにおもわれる。

まず、①の文章についてみると、これは、商品が、いろいろにちがった自然的性質をもった物であつて、その自然的性質に應じてそれぞれ特定の使用目的に役立つことができ、その意味で、商品は使用価値としてある、ということ述べたものである。しかし、この場合にも、わが「原理論」創造者の手に成る文章の中に出てくる重要な言葉Ⅱ概念については、けつしてこれらにたいして通常の論理的・国語的解釈をもつて接してはならないということを銘記していなければならないのであつて、ここでとくに注意を要する概念としては、使用価値がある。使用価値という言葉を経済学の中にとりいれ、これをひとつの経済学的概念につくりかえたのは、スミスをはじめとする古典学派である。スミスは、分業の上に成り立つ文明社会では労働生産物はすべて商品となり、その商品は人間にとつてのねうち、つまり価値をもつが、それは、二つのねうち、または役立ち、つまり価値をもつものだということを見出した。そのひとつは、使用におけるねうち、または価値 (value in use, use-value) であり、他のひとつは交換におけるねうち、または価値 (value in exchange, exchange-value) である。使用価値と交換価値という、この二種の価値をもたないものは商品ではありえないのであつて、このことは、スミスならずとも、通常の思考能力をそなえているほどの者ならば、一人として知らないものはない。だから、すべての商品は、一樣に使用価値と交換価値との二種の価値を有するという点で、同質なものである、つまり、二種の価値を有するという同質性をもっているのであつて、このような同質性

をもたないものは、商品ではありえないのである。こうしたことは、ふつうの論理的思考能力をもっているごく当りまえの人にとっては、自明のところといつてよい。

では、ロの文章は、どうか？ われわれの住んでいる社会で商品という商品がひとつ残らず金何円という価格をもつていて、その価格にしたがって商品と貨幣との交換が、つまり商品の売買がおなわれているということは、だれひとり知らない者はない。これもまた、自明のことを述べたにすぎないようにおもわれる。

ところが、ハの文章にいたって、事柄はしかく簡単・自明なものではないということを知らされることになる。というのは、「その物的性質と関係なく、質的に一様で単に量的に異なるにすぎないという一面」というさいの「一面」が、はたして、どのような一面を指したのか、それについての説明がいつさい省かれていくからである。

通常の論理的思考能力しかもっていない者は、ここでもう一度イの文章にたちかえて種々異なった商品を頭の中で思い浮べてみなければならない。たとえば、小麦、靴墨、絹、鉄、等々である。これらのものについて、「物的性質と関係なく、質的に一様で単に量的に異なるにすぎないという一面」が、どこに見られるであろうか？ ここで、ブルジョア経済学ないしは近代理論経済学についてすこしでも聞きかじったことのある者ならば、こう言うであろう。

——「諸商品は、物的性質は種々異なっているが、しかし、いずれも人間にとって使用における価値というものを、共通にもっている。つまり、すべての商品が使用価値をもっていること、いいかえれば効用をもっているというのが、その一面といわれるものではないか」と。そして、実際に、ブルジョア経済学者は、この共通な効用に着目して、そこに商品の価格を結びつけることによって、価格の実体とその大きさの説明をしているのである。こうした解釈に立つときは、①を構成する三つの文章は、つぎのような関連をもつものだということになる。すなわち、「商品

は、それぞれ物的性質は異なるが、しかし、いずれの商品もひとしく人間にとつての使用におけるねうちつまり使用価値または効用をもっているのであって、この効用をもつという共通の一面を有することは、すべて一様に金何円という価格によって表示されていることから明らかである」と。

しかし、右のような解釈が、氏の世紀的な超論理的思考と超国語的語法の駆使というきわめて高い水準からみて、ほとんど取るにたりないものであり、氏の独自の文章を誤読したものにほかならないことは、いうまでもない。かれらは、ハの文章の中の「物的性質と関係なく」という文句の奥深い意味をただしく読みとることができないのである。この「物的性質と関係なく」という、たった一つの文句によって、すでに商品の使用価値の側面はことごとく排除されているのだ、ということが、かれらの普通の論理的理解能力をもってしては、絶対にとらえられえないのである。商品の効用に価格を結びつけるブルジョア経済学の見地が完全な誤りであることはつとにマルクスが論証しているところであつて、マルクスをさらに超克した純粹「原理論」の創造者の眼中には、右のようなブルジョア経済学の見地はまったくなく、完全に抹消されていることに留意しなければならないのである。はるかに低水準にあるマルクスがすでに克服した誤った効用価値説を、超マルクスの最高水準にある世紀的「原理論」創造者が、どうしてとりあげる必要があるのか。

それゆえ、わずか三つの文章の組合せから成る①の叙述は、すでに言外にマルクス価値論を完全に「揚棄」した形でふくんでいるのであって、このことが読みとれない者は普通の低い論理的理解能力しかもっていないものにかぎられる。要するに①の文章は、すでに、商品は一方において物的性質とかわりある使用価値をもっているが、他方、物的性質と関係のない、質的に一様で単に量的にちがっているだけだという一面があることは、誰でも認めなければ

ならないのであって、そのことは、商品がすべて一様に金何円という価格を有していることを見ればたちどころにわかるということ、それがわからないのはまだ普通の論理的理解能力という低水準にあるがためである、ということとを述べているのである。だから、「すべて一様に金何円という価格を有している」ということが、そのまま「物的性質と関係なく、質的に一様で単に量的に異なるにすぎないという一面」そのものと符合するものだということを正常な論理的思考によって判断し、「価格を有している」ことがとりもなおさず「質的に一様で単に量的にちがうだけの一面」だとして、右のロとハとの文章を懇切丁寧に表現しなおしてつぎのような文章を導き出すとすれば、かれは、超論理的思考と超国語的語法をまったく感得することのできないあわれなマルクス盲従者として当然に弾劾される運命に甘んじなければならないのである。

「商品は、すべて一様に、物的性質に關係なく質的に一様で単に量的に異なるにすぎないものとして、ひとしく金何円という価格を有しているのであって、このことから明らかなように、商品は、物的性質に關係なく、質的に一様で単に量的に異なるにすぎないという一面を有しているのである」！これをしも錯乱的トウトロギーと呼ぶ者は、わが世紀的「原理論」創造者の画期的超論理的思考の超能力のほどがわからないものであり、永久に救われない者なのである。

とはいえ、①の文章は、まだほんの序の口にすぎない。わが世紀的「原理論」創造者の超論理的思考と超国語的語法の偉大な真価がいかなく發揮されるのは、②以下の文章においてである。

②において、いよいよ価値という言葉が登場する段取りとなるが、それは、もちろん、あらかじめ必要な予備的説明をおいてから出てくるというような、ありきたりの手数をかけることなどいっさいなく、突如として、まさに人の



意表について出てくるのである。ここにこそ、超論理的思考の絶大な真価が認められなければならないといつてよい。商品の価値とは、「かかる同質性」を指して言うのである、という、いわば至上命令にも似た断固たる宣示が下されているのである。「かかる同質性」という言葉がなにを意味するのか、普通の論理的思考しかできない者にはただちに判断することはむづかしいが、しかし、通常の国語的語法にしたがつて考えれば、それは、①の文章の中のハにある「その物的性質と関係なく、質的に一様で単に量的に異なるにすぎないという一面を有している」という文句に示されているもの、つまり、物的性質にかかわりない質的一様性を指しての言葉としか解釈のしようはない。

そこで、①と②とをひとつにまとめて、簡単に表現すれば、そして、①の口は、「……ということからも明らかのように」という文句がよく示しているように、たんなる副詞句として強調するために置かれているものであるからこれを省略するとすれば、つぎのような「命題」が得られる。——「商品は、その使用価値は異質でありながら、質的一様性すなわち同質性を有するのであって、この同質性を価値というのである」。

通常の論理的思考と国語的語法にしたがえば、商品の価値が質的にちがっているものとはどうしても考えられず、同質としか考えられないのであるから、右の要約的「命題」は、これをさらに簡約化することができるのであって、それは、

「商品は、それぞれ異なった使用価値をもっているが、価値をもつものとしていずれも一様・同質である。」となり、最終的には、つぎのような純粹「原理論」的「命題」Ⅱ「宣示」に帰着するのである。

「商品は、使用価値と価値とをもつものである」。

もし、わが「原理論」創造者の超能力についてなんらの知識ももたない、ありきたりの論理的思考と国語的語法し

かわきまえない普通人が、第一章「商品」の冒頭にこうした「命題」がなんの説明もなしにかかげられているのを見たならば、これにたいして、おそらく、「これでは、マルクスの『資本論』第一巻第一章第一節の分析の結果を剽窃して、そのままかかげただけのものではないか。これは、価値という言葉のおしつけでしかない。第一、これでは、マルクスの言う価値なのか、それとも、古典学派の価値か、限界効用学派の価値か、まったくわからないではないか」という、非難の言葉が思わず口をついて出ることであろう。気の毒にも、こうした人たちは、書かれた文字だけ読んで、その奥にかくされた、書かれていない文字と奥深い内容を読みとるという、超論理的思考と超国語的語法の偉力をまったく知らない、あわれた凡人でしかないのである。わが世紀的「原理論」創造者は、古典学派の諸理論はもちろんのこと、マルクスの『資本論』全三巻の内容はとつくの昔に完全に「揚棄」してしまっているのである。凡人には「揚棄 *aufheben*」という肝心の概念が呑みこめないのは、致し方ないのである。 *aufheben* とは、その内容を保存しつつ、高めて変革することなのだ。だから、わが世紀的創造者は、もちろん、厳密の意味で完全にマルクスの理論を「揚棄」しつくしているものであり、したがって、マルクスの価値概念のごときは、表わされた文字の外に、書くにも値しないものとしてすっかり含まれているのである。つまり、右のような、まさに御託宜にも似た冒頭の純粹「命題」は、マルクス価値概念を踏まえて、さらにこれを数段より高い段階に引き上げてつくりあげた純粹エッセンスとしての価値の説明なのである。

ところで、マルクスの価値概念に囚われたありきたりの初学者のうちには、①の口について、「価格は価値の現象形態にほかならないから、その価値の現象形態である価格を有していることをもってきてあらかじめ同質性を説くのはまさしくベテンを弄するものではないか」とか、あるいはまた、「商品の価値は、いうまでもなく同質である。だ

から、商品価値とは商品の同質性をいうのだと説くのは、純粹のまやか<sup>まやか</sup>しではないか」と言つて、わが世紀的「原理論」創造者に食つてかかる者も出てくるはずである。だが、わが世紀的創造者は、こうした論駁にはよくなれていたのであつて、少しも騒<sup>さわ</sup>がず、泰然としてこう言うのである。——「ありきたりの論理や語法はもちろんのこと、マルクスの概念をもつてきてそれと違つているからと言つて、そんなものは批判にはならない。わたくし自身の論理と語法に即して、どこに誤りがあるかを言いたまえ。それが内在的批判というものだ。」

③と④についても、おそらく、マルクスに「心酔」して『資本論』の「訓詁注釈」に「夢中」になっている初学者は、右と同様の批判をこころみるであらう。③についていえば、「その幾何かによつて他の任意の商品の一定量と交換せられるべきものであること」というのは、それが交換価値をもっているということにほかならないのであつて、③の文章は、つづめれば、「商品の価値とは、商品が交換価値をもつものであることを示すものにほかならない」となる。マルクスによれば、交換価値は価値の現象形態であるから、右の文章は、まったく支離滅裂の逆立ち式トウトロギーにほかならないではないか、というわけである。④の文章が、右の逆立ちしたトウトロギーをいたずらに「駄目おし」しているものにほかならないことは、明らかではないか、として、右の③と④にたいして、はげしい論難の言葉を連ねることであらう。しかし、これらの囚われた初学者のあいづく批判が、さきにかかげたわが世紀的創造者の超論理的駁論の前にあえなく潰えなければならぬ運命におちいるのも、また理の当然といつてよい。

なお、右のような囚われた、訓詁解釈を事とする初学者諸君が、わが世紀的創造者の手に成る『經濟原論』第一篇第一章「商品」の冒頭の中に「商品は価値をもつ」という御託宣しか見出せず、「資本の労働生産過程においてこそ価値の実体は論証されなければならない」という世紀的創造者の度重なるマルクス論難の「命題」に導かれて、勢い

こんで、その第三篇「生産論」第一章「資本の生産過程」の第一節「労働生産過程」について該当個所を見出そうと骨を折っても、それは、所詮徒勞に終わるほかないものだということを、あらかじめ忠告しておこう。そこでは、はじめから、「例えば今仮りに六キロの綿花と一台の機械とをもって六キロの綿糸を生産するのに六時間の労働を要するものとしよう」(前出、五〇ページ)として、価値の実体が人間的労働にほかならないことが述べられていて、「論証」などというものは、棄にしたくとも見当らないからである。ただし、そうは言っても、それは通常の論理的思考と国語的語法とによって右の個所をふくむ一節を読むからのことであって、これとはちがつて、わが世紀的創造者の超論理的思考と超国語的語法とをもつてするときには、その表面には現われていない、真にマルクスを完全に超克し「揚棄」しつくしたところの、「価値の実体」の論証が秘められていることを、紙上ではなくまさに紙背にしかと読みとることができるのであって、こうした点にこそ、「原理論」的論法の画期的真髓が存するのだといつてよい。

さて、これまで吟味してきたわが「原理論」創造者による商品価値の説明とマルクス『資本論』における商品価値の説明とをつきあわせてみると、われわれは、両者がまったくかけ離れた完全に異質のものであることを認めざるをえない。

マルクスにあつては、まず、商品は、私的所有という特定の歴史的生産関係のもとで、私的労働の生産物が必然的に採る社会的形態であるが、これに反して、世紀的「原理論」創造者にあつては、商品・貨幣・資本はいかなる生産関係ともかわりのない純粹の「流れ通る形」にすぎない。

マルクスは、価値とはなにかを究明するために、まず見たままの商品をとりあげ、それが使用価値と交換価値をもっていることを確認したうえで、その交換価値に厳密な論理的分析を加えることによって、その奥に抽象的・人間的

労働の結晶としての商品価値があることをつきとめ、かくして価値と価値の実体とを説明し、さらに価値規定および価値法則を明らかにすることも、本質としての価値の必然的な現象形態としての交換価値を論究し、はじめて科学的な貨幣理論をうちたてたものである。

では、宇野氏の主著『経済原論』のなかで、価値とはなにかということの説明はあるか？　といえ、そこに見出されるのは、さきに見たように、「商品は、異質の使用価値と同質の価値を有している。価値が同質性をあらわすことは、価格をみれば明らかである」というのが、その説明の全部なのである。通常の論理的思考と国語的語法になれている人々は、この、神がかり的御託宣そっくりの文章を読んで、それが価値とはなにかということの説明であることはとうてい理解できないのであって、そこに出てくる価値は、俗流経済学もしくは精々のところ古典学派の価値概念を説明ぬきでおしつただけのものだとの判断を下すことであろう。だが、それは、かれらがわが「原理論」創造者の変通自在ともいうべき超論理的思考と超国語的語法の世紀的玄妙さをまったく知らないからなのである。この創造者の手に成る「原理論」的見地にひとたび立つならば、右の簡潔な文章の中に、俗流経済学はもとより、古典学派の価値概念もマルクスの価値概念もことごとく完全に「揚棄」されつくしてふくまれていることが、紙背に浮び上ってくるはずなのである。だから、マルクス『資本論』をかじりかけただけで世紀的「原理論」の玄妙性に心酔してしまっただけ出しの帰依者がよくやるように、マルクス『資本論』の該当する叙述を下敷きにしてそのうえに簡単な「原理論的命題」を記した透明紙を置いて、後者の「命題」の足りないところを前者の叙述で補って解説するなどというような、折衷的ごまかしをすることは、「原理論」見地の純粋性を傷けるものであり、超論理的思考と超国語的語法とをもって練りあげた世紀的「命題」の含蓄ある内容を辱かしめるものといわなければならない。かくして、や

つとのことでヘーゲル弁証法をものにしこれを適用して科学をつくりあげたとされるマルクスにたいして、わが「原理論」創造者は、「ヘーゲルになると、その批判的研究はおろか、ロクに読んだともいえない」(著書『社会科学の根本問題』、一二二ページ)としていとも簡単にヘーゲル弁証法を超克し、「流通形態」、「労働生産過程」、等々の斬新な用語をつぎつぎと創作し、かくして、経済学をまったく質を異にした高度・画期的科学につくりかえたのである。これによって、諸科学のうちでとくにひとり経済学がいかに群を抜いて前代未聞の世紀的高さの超<sup>ウルトラ</sup>科学に生まれ変わったかということは、その他の自然科学における旧態依然たる唯物弁証法への執着や古臭い用語の墨守をみれば、簡単にわかる。たとえば、天文学では、「地球・火星・金星は公転する。だから地球・火星・金星は公転形態である」という、斬新・画期的命題を唱える学者がいたとすれば、かれはたちまち相手にされなくなり、また化学の分野で「醗酵釀造過程」という、世紀的概念を唱え出したりする者があれば、いずれもたちまち精神鑑定が問題になるというように、きわめておくれた低水準にあるのである。かくて、経済学の分野において、ひとり経済学においてのみ、もつとも高度の、ありきたりの科学を超克してやまぬ超<sup>ウルトラ</sup>科学としての「原理論」<sup>(10)</sup>がわが創造者の手によって樹立されたことは、なんとすばらしいことであらうか！

(10) このように、超<sup>ウルトラ</sup>科学的経済学をうちたてた「原理論」創造者の高名にひかれて、その「原理論」を熱心・忠実に摂取しようという「専門家」があまた簇生するのは、当然の成行といつてよい。この創造者の主著と同じ主題の『経済原論』を著わした富塚良三氏も、その著書の「序説」で、「経済学の原理論」という、わが世紀的創造者の発明にかかる超国語的用語をかかげ、「いわゆる『原理論』と『段階論』は、こうした関連にあるものとして理解されなければならない」といった、わが創造者そっくりの口ぶりで、教示を垂れている。わが世紀的創造者の超論理的思考と超国語的語法の玄妙さについては、ほぼこれを感じとることができるのであるが、富塚氏が、わが創造者と同じ右の玄妙性を体得して、同じ超国語的用語をさかん

に用いているかどうかは定かでないので、わたくしは、氏の『経済原論』の中に出てくる二、三の用語と文章について、どういう意味をもつものであるかを教示してほしい旨、前稿『貨幣の範疇規定について』（本誌、第三十一巻第一号、八一―八四ページ）のなかで要請しておいたものである。なお、わたくしには、「原理論」という「論」と「段階論」という「論」とが、いったい、どういう「論」であるのか、これまでまったく理解できなかったもので、これらの言葉を論理的にはつきりと与えることができるよう、英語かまたはドイツ語で正確に表現してもらいたい旨も、あわせて要請しておいたのである。その拙論が公表されたのは、三年前の一九七七年七月のことである。その後、本誌の熱心な読者で問題に関心を寄せる方々から、質問にたいする富塚氏の理論的回答を公表してほしいとの要望が再三寄せられたが、わたくしとしても、ことは経済学の根本的な問題にもかかわりがあり、かつまた本稿での拙論展開とも至大の関連をもつ事柄であるので、読者論君にたいする報告義務をはたす意味もかねて、さきの富塚氏への質問提起についてのその後の経過を、簡単に述べておくことにしたいと考える。

拙論公表後かなりの時日を経てから、わたくしの手許に富塚氏の回答を示した簡単な書簡が届いたのであるが、その内容はわたくしの問題提起にたいする回答といえるようなものではなかった。要するに、それは「自分は宇野理論の支持者でない。誤解しないでほしい。目下のところ自分は身体の調子がよくないので、返事は勘弁してもらいたい」というものであった。こういう文面の回答に接したときのわたくしの複雑な気持ちを、読者諸君はどうかよろしくお察しいただきたい。わたくしとしては、きわめて控え目に「氏の教示をうけるための質問提起」だとして、丁寧に回答を要請したのである。これが、かつて法政大学大原社会問題研究所に属してその教示を得ていたはずの当の所長久留間鯨造先生に向っての「公開書簡」を突如として公表して先生からむりやり「弁明」を引き出そうとした「大学教授」の、わたくしの質問にたいする「回答」であるとは。おそらく、富塚氏は、わたくしの回答依頼など歯牙にもかけないほどの「大家」でいられるのであろう。わたくしは、文字どおり、「鼻の先であしらわれた」のである。しかし、この「回答」は、学問にたずさわる者の書いたものとしては、甚だ当を得ないものだとおもわれる。

氏は、「自分は宇野理論の支持者ではないのだ」と言われている。氏は、経済学の「専門家」であるかもしれぬが、どうやら理論的文章の読み方については、ずぶの素人より落ちるようである。わたくしの書いた文字を、どうかも一度、よく目を開いて読みなおしていただきたい。わたくしは、富塚氏が熱心な「宇野理論」の支持者である、と書いている。宇野理論の支持者だとは書いていない。括弧をつけたのは、そもそも宇野理論などという理論は、つまり厳格な意味での理論などというも

のは、薬にしたくともありはしないからである。あるのは括弧つきの「宇野理論」でしかないのである。では、「宇野理論」とは、どういう「理論」、つまり似<sup>ニ</sup>非<sup>ヒ</sup>理論であるかといえば、それは、つぎのようなきわだった特徴の寄せ集めから成っている「学問的」空文句の羅列といったものである。

第一、この「理論」の材料、つまりねたはひとつのこらず、マルクスの著作、とりわけ『資本論』からのものであり、この材料を——さきにとくとく玩味したように——超論理的思考と超国語的語法で切りぎざみ、ばらばらにし、つぎはぎをして、まったく質を異にする「理論」を、ただその創造者にしかわからない玄妙きわまるお体裁の「理論」をこしらえあげていること。

第二、右のように超論理的思考と超国語的語法とをもってこしらえあげた「理論」に、まったく斬新・奇抜な「原理論」という「論」の名を冠して、その超マルクスの意義を明確にしていること。そして、「原理論」という「論」ひとつでは不足だとして、必ず「段階論」という「論」を製造して、この二つの「論」を並べてひけらかしていること。

第三、必ずマルクス『資本論』にけちをつけて、それが一〇〇パーセント正しいものではないとか、どこそこの点が明確でないとか、ここが「不純」であるとか、あれこれ言いがかりを弄すること。これによって超論理的思考と超国語的語法をもって『資本論』をねたとしてこしらえあげたかれら自身の創造物——「原理論」が超マルクスの傑作であることをいとも手軽にかつ効果的に宣伝していること。

第四、超論理的思考と超国語的語法とが唯一の頼りとも柱ともなっているおかげで、ふつうの基本的概念についても、正常な論理的思考と通常の国語的語法とをもってしては絶対的に理解しえないような、まさに前代未聞の、世紀的奇抜性と珍妙性をおかねそなえた言葉、文句および文章をつぎつぎと創作してやまないこと。

以上の四つが、「宇野理論」いいかえれば世紀的「原理論」のきわだった特徴であって、これら四つを取り去ると、あとにはなにも残らないというのが、「宇野理論」なのである。だから、もし、富塚氏の『経済原論』の中味が、右の四つの特徴をびったりそなえているのであれば、氏はりっぱに「宇野理論」の支持者であり、そのもっとも熱烈な「専門家」のひとつであるといわなければならないのである。

わたくしが、前稿『貨幣の範疇規定について』において、ごく控え目に注記の中で、富塚氏にたいして町重にその回答をお願いした四の質問事項は、いずれも、ここにあげた「宇野理論」の四大特徴にかかわりのあるものであることは、宇野流の超



超論理的思考と超國語的語法の玄妙さを体得することのできない、普通の論理的思考とごく普通の國語的語法しか知らない初学者にとっても、容易に感じとられたはずのものである。

富塚氏の回答の二番目に出てくる「鼻さきであしらう」の弁は、「目下身体の調子が悪いので、返事は勘弁してほしい」であるが、これは、世紀的「原理論」創造者のまさに上を往くものとして特筆に値するものといつてよい。わたくしはかつて本誌上で「宇野理論」の超論理性を論証し、その中で例の画期的な「流れ通る形」論について批判したさい、「宇野氏が小生への駁論の最初において、ぜひとも「形態」および「形態規定」という用語の意味を、ひとが誤りなく理解できるように形で、明確に説明した文章をかがげられるよう、切に期待したいと思う」（本誌、第二十四卷第三号、九二ページ参照）と明記して丁寧に説明し駁論を要請したのであるが、これにたいし、ついに一言の回答も寄せられることなく、ついに「答えない」ことで「答えられない」ことを示すだけに終ったものである。これにひきかえ、富塚氏は、「身体の調子」を理由にして回答をはぐらかし、「身体の調子が悪い」にもかかわらず、相も変わらず「資本論の分析」などという超論理的・超國語的題名の著作には励んでいるのである。富塚氏の強引な「公開書簡」にたいして、久留間先生は、八十六才の高令で不朽の労作「マルクス・レキシコン」の執筆に逐われている身にもかかわらず、これにたいする懇切な回答を綴って発表されたが、これにたいしては富塚氏はいまだまとまった駁論ひとつ作成できないで、『資本論の分析』執筆に忙しい、という有様である。こうした、久留間先生および小生にたいする「学問的」交渉における富塚氏の応待は、元祖宇野氏をはるかに凌駕するもので、まさに「強められた」超論理的「専門家」と称されるに値するものといつてよい。

だが、経済学の分野での正しい発展をこいねがうわたくしとしては、やはり、富塚氏の「あしらい」にもかかわらず、さきに提出した疑問にたいする富塚氏の明確な回答をぜひとも得たいと考えるので、今回は、はっきりと、「富塚氏にたいする公開書簡」として、さきにあげた問題とこれに一、二を加えて、明確に提示して、なるべく早い機会に氏からの回答を期待したいとおもう。

#### 「富塚氏にたいする公開書簡」

1 氏の『経済原論』の「序説」一ページには、『資本論』において『原理論』があらゆる論点にわたって完成されていて彫琢の余地も発展の余地もなく、したがって『原理論』の研究は『資本論』の訓詁註釈にほかならないとする見解には必ずしも賛成できない」とある。では『資本論』のどこに「彫琢の余地」と「発展の余地」があるか、はっきり言っていたきたい。

#### 価値理論の展開（二）

文体や表現は問題ではない。理論体系として、科学としてどこに「未完成」のところ、「不十分」のところがあるかを、教示していただきたい。たとえば、物理学の分野で、湯川理論をとらえて「湯川理論があらゆる論点にわたって完成されていて彫琢の余地もないという見解には必ずしも賛成できない」とその著書の冒頭に大書する人物がいたとしたら、この男を物理学の専門家Ⅱ大学教授としてとりあつかう者が一人でもいるだろうか！

2 「序説」二ページには、「資本論」は産業資本主義段階の古典的形態の資本主義社会の表象のもとに書かれたものである」と明記されている。これは、わたくしにはどう考えても理解できない。「表象」という言葉の意味を説明して、それにもとづいて古典的資本主義社会の表象のもとに書くとは、どういう書き方を言うのか、判りやすくはつきりと教示していただきたい。

3 「序説」三ページには、「宇野弘蔵氏の『原理論』『段階論』『現状分析』のいわゆる「三段階論」は、……極めて当然なことを述べられている」にすぎないようにおもわれる」とあり、富塚氏も、右の三つの言葉をしばしば明記されている。そこで、「原理論」「段階論」および「三段階論」について、まずそれらの「論」とはどういうことを説明し、これら三つの言葉を論理的に正しく表現しうる英語またはドイツ語で言っていただき、最後に簡単にそれらの意味をわかりやすく手ほどきして下さるようお願いしたい。

4 宇野氏の「原理論」Ⅱ『経済原論』は、「商品・貨幣・資本は純粹の流通形態であって、いかなる生産過程ともいかなる生産関係とも直接に関係のないものである」という、世紀的・画期的「命題」を唯一の基本Ⅱ主柱としていて、そのために、その「原理論」Ⅱ『経済原論』は、第一篇「流通論」第二篇「生産論」第三篇「分配論」の構成となっており、これが唯一の正しい「原理論」であるところかえし述べられている。だが、富塚氏の「原理論」Ⅱ『経済原論』は、これとまったくちがって、「資本論」の構成をそのまま真似たものとなっている。そこで、つぎの点をわかりやすく説明していただきたい。

イ 右の宇野氏の世紀的「命題」を富塚氏は正しいものと認めるかどうか？ もし正しいと認めるならば、「流通形態」という言葉を説明して、右の「命題」の意味するところを説明していただきたい。

ロ 右の「命題」を認めるか認めないにかかわりなく、まったく本質的にちがった構成の二つの「理論」をとらえ、どちらも「原理論」であるということが、どうして許されるのか、わかりやすくその理由を説明していただきたい。

ハ 同じく「原理論」の書といいながら、宇野氏のそれとまったくちがって、マルクス『資本論』の構成をそのまま真似た

がら、しかも、『資本論』とちがって、その第Ⅲ編を「資本の総過程」と規定したこの意味をわかりやすく説明していただきたい。マルクス『資本論』では、第三巻は「資本主義的生産の総過程」となっていて、まさしく「生産」の「総過程」についての叙述であることがはっきりと規定されて示されている。だが、「生産」をとり去ってしまったただの「資本」について、いったい、どういう「総過程」がありうるのか、超論理的思考と超国語的語法にはうといわたくしなどは、とうていはいかれない。どうか「過程」という言葉をわかりやすく説明して、そのうえで「資本の総過程」とはどういうことか、よく説明していただきたい。そして、こうした方がいいについて、これがまさしくマルクスの叙述の「不完全」「不充分」なところであり、富塚氏がこれを右のように訂正して完璧な「原理論」体系をはじめてうちたてたものだということを、あわせてわかりやすく説明ねがえれば、これに越した喜びはない、と申上げておきたい。

なお、ついながら、「資本論の分析」という画期的用語についても、分析の意味を明らかにしたうえで「資本論の分析」とはこういう意味のことだとわかりやすく説明していただければ、初学者はもとより、『資本論』の「専門家」にとっても裨益するところ大と確信するので、あわせてぜひ説明していただきたい。

まだ御教示を得たいことは数えきれないほどあるが、ここでは重要な基本的意義をもつものだけ再度とりあえず取りあげて、公開書簡という形で提示したが、これは、富塚氏がまた「身体の調子が悪くなる」ことのないよう配意したものであって、富塚氏の先鞭にならったまでである。どうか身体に留意されて、なるべく早い機会に教示して下さい、重ねてお願いしておく次第である。

われわれは、親愛なる読者諸君とともに、富塚氏が宇野氏に劣らず超論理的思考と超国語的語法とを駆使してどんなに内容豊富な回答を示してくれるであろうことを大いに期待するものであるが、しかし、富塚氏といえどもなお若干の時間は要するものと推察されるので、その回答に接するまでの時間を利用して、宇野氏と富塚氏がさかんに連発する「論」という言葉について、わたくしなりの注釈をここに述べておくことにしたい。

たとえば「地代論」という場合の「論」は明らかに「理論」である。つまり「地代の法則を明らかにした理論」である。これ以外につかわれるのは、むかし帝国大学で講義課目を偉らそうに見せかけるためにつけた「論」で、たとえば「経済政策論」のごときものである。この「論」は、英語で表現すれば、lecture かもしくは study であって、なんなる日本の事大主義的課目名の呼称にすぎない。ところが、超国語的語法を得意とする「原理論」創造者は、これを学問のひとつに仕立てて、

「経済政策論」という学問分野があるといった斬新な超論理的用語をこしらえたのである。lecture または study が一学問分野になるとは、なんとすばらしい世紀的科学論であらうか！ 理論を別とすれば、「論」は、「……を論ず」といったような、いわば「分類」研究をあらわすものしかありえない、というのが、わたくしの考え方である。この意味での「論」は通常の国語的語法の世界では広く用いられているものであって、わたくしも、近い将来、この「論」を利用して、たとえば「大文学教授論」といったものを、エッセイ風に、フィクションとして書いてみたいと考えているが、その中に登場する予定の大学教授はいずれもわたくしの筆によって創作された典型的人物ばかりになるはずである。こころみに、その創作された登場人物の一人を描くとすれば、そのプロットはざっとつぎの通りである。

「わたくしは一九五〇年に『恐慌論研究』を書き下ろして公刊したが、これはそのころ——そしていまなお——支配的な均衡論的恐慌論の根本的誤謬を明らかにしたものであって、かなり高い評価を得たものであった。当時、久留間先生はさきに『恐慌論研究』を公刊されており、つとに令名は高かったので、拙著出版を機として先生を法政大学大原社会問題研究所にお訪ねして教示をえたいと考え、所長室でしばし歓談の時を過したことがあった。ところが、二時間近くたって辞去すべく、先生に送られて所長室のドアを開けて外に出ると、扉の蔭にしゃがんでいる男がいるではないか。思わず、「君はそこでなにをしているのか？」とただと、くだんの男は、悪びれもせず、すました顔でこう言っただけのことである。——「久留間先生も山本さんも恐慌論では先達なので。恐慌論についてどんなに重要な会話が交わされるか、知リたかったので、ここで聴かしてもらったのです」。先生とわたくしとは、理論のことよりもそのほかのことでより多く語ったのであるが、くだんの男は、一語も聞きもらすまいと耳を扉につけるようにしてうかがい聴いていたのである。わたくしは、この男の異常な「学問」熱心に感心すると同時に盗聴をあえてする非礼にあきれましたのであるが、こうした「努力」の甲斐あってか、かれは後年首尾よく大学教授の地位にありつくことになったが、そこで今度は、たちまち久留間先生にたいして公開質問状をつきつけるほどの大物に成り上ったのである。」

(未完)